

名古屋で若者らシンポ

# 不登校 必要な時間だった

「子どもが学校に行かなくなったとき」と題したという。二世帯が同居した勉強会が二十八日、名古屋市内で開かれ、四人でいいのか思いつかず、の若者が不登校の体験を無意識に顔色をうかがって告白した。学校に行けなかった。「どこにも居場いい心の苦しさが語られる所がない」と追い込み中、愛知県春日井市の馬場、自室に閉じこもった馬場健作さん(三巴)は「今の自分には必要な時間だった」と振り返った。この断片的だ。「記憶喪失に前向きな言葉に、現在進んでいかなかったら」。行形で悩む保護者らが聞学校に行きたいとは思ってき入った。

「私は、小学四年から将来、できるかもしれない。中学三年まで不登校でいい。家族に伝えると、た」。農作業着姿の馬場 中部地方にある二十以上さんは、穏やかな口調で不登校の見学に付き

語り始めた。

学校では級友にいじめられた。先生は取り合ってくれず、逆に立たされ

「子どもが学校に行かなくなったとき」と題したという。二世帯が同居した勉強会が二十八日、名古屋市内で開かれ、四人でいいのか思いつかず、の若者が不登校の体験を無意識に顔色をうかがって告白した。学校に行けなかった。「どこにも居場いい心の苦しさが語られる所がない」と追い込み中、愛知県春日井市の馬場、自室に閉じこもった馬場健作さん(三巴)は「今の自分には必要な時間だった」と振り返った。この断片的だ。「記憶喪失に前向きな言葉に、現在進んでいかなかったら」。行形で悩む保護者らが聞学校に行きたいとは思ってき入った。

## 悩む家族「少し希望が」

添ってくれた。

三重県伊賀市の全寮制の学校で、体験入学会で見た現役生の目の輝きが、進学を決意させた。

「ここなら居場所を見つけれられるかも」。入学後は、部屋を分かち合う先輩が、ちょっととした悩みを深夜まで聞いてくれた。

今は郵便局で配達のアールバイトをしながら、高校時代の先輩と有機農法の野菜作りに励んでいる。独立するつもりだ。

学校へ行けなかった時に来てくれた家庭教師の人や、顔を出したフリースクールの先生も、親身になってくれた恩人だと思っている。「苦しかったこともすべて、今の自分をつくる土台になっている」と話した。



不登校の体験を告白する馬場健作さん(28日、名古屋市中区で)

けんさく さん

会場で馬場さんに大きな拍手を送った女性(画)は、伏し目がちにこう感想を語った。「不登校の娘にどうやって声を掛けたいか自信を失っていたけど、少し希望が見えた」 (谷悠巳)

## 親が重圧与えないで

勉強会では子どももの居場所づくりに取り組むNPO法人「フリースペースたまりば」(川崎市)



西野博之さん

### 専門家訴え

の理事長で精神保健福祉士の西野博之さんが講演し「学校に戻ることに執着しないで」と保護者に訴えた。

二十五年にわたり不登校問題に取り組み中で、支援した子の自殺にも直面してきた。親から求め

「学校側は子どもの復学を基本に考えるので、支援施設や保護者会の存在を知らない親も多い。こうした勉強会で情報を発信していきたい」と話

られ、学校に再び通い始める。学校に再び通い始める。学校に再び通い始める。学校に再び通い始める。学校に再び通い始める。

「学校に戻ることに執着しないで」と保護者に訴えた。

二十五年にわたり不登校問題に取り組み中で、支援した子の自殺にも直面してきた。親から求め